

キリスト教の教会では、年に1回程度、特別伝道礼拝と称して、一般の方にもキリスト教信仰のことをわかりやすくお話をする機会を設けています。このところ、新型コロナウイルスの蔓延で、私たち青戸教会も不特定多数の方々を招くような特別伝道礼拝を開催することができずにいました。新型コロナウイルスは5類に移行しましたが、まだ私どもの教会では予防のためにマスク着用を皆さまにお願いしているところであります。

たまたま、私が何年間か青戸教会の牧師の仕事と並行する形で、ヤマザキ動物看護大学の教授をしていたのですが今年3月に定年退職しました。在籍中に卒論指導でペットロスの指導をたくさんしてきたことがありましたが、ペットロスの話が一般の方に興味があるのではないかという話になり、それでは特別伝道礼拝でペットロスの話をする事になり、本日の開催となったわけです。

ペットロスという事は、ペットを飼っている方には特殊なことではありません。現在、日本での犬猫のペット飼育数は約1800万匹で、15歳以下の児童数が1500万人と比べてもペットの数のほうが断然多いのです。犬猫以外の鳥や亀などのペットの数を合計すると、2000万に優に越えるものとも想定されています。しかも、ペットの犬猫は家庭内で飼育していても14、15歳が寿命なので、飼い主がペットロスになる必然性が高いのです。今日お越しの皆さまの中にも、既に愛するペットを亡くしたご経験をお持ちの方もいらっしゃると思いますので、亡くされたあとのグリーフの話も最後の方でしようと思っております。

最初に、私自身のことについて少々お話しします。私は牧師になって30年以上経ちます。この間、牧師の仕事と共に、教員生活を併せて行ってきました。最初は自分の出身神学校の教員として牧師養成の仕事をしてきました。その仕事を辞めた後に、動物看護師を養成するヤマザキ看護大学からお誘いがあったて、教授をしてきました。ヤマザキ動物看護大学では、生命倫理や哲学、文章作成などの講義をしてきましたが、ゼミ生の卒論指導で毎年3、4人はペットロスをテーマにして卒論を書き上げてきました。

私は牧師になった後、東洋英和女学院大学の大学院で精神科医の平山正美先生について死別をテーマに勉強しました。人間の死別経験とそこからの立ち直りが私のテーマでした。愛着関係にある人との死に別れによって生じる精神的なストレスがテーマです。そして、この死別経験は愛着のあるペットと死に別れでも、人間の側に生じる様々な悲嘆反応としては同じような状況になるのです。ですから、ペットロスは自分には関係ないと思われている方も、今日の話は人間が必ず出会ってしまう愛する者との死別からどのように立ち直る道を見つけ出すかという話としてお聞きしてくださいと、本日の特別伝道礼拝の意義があると思っております。

さて、私の家には現在黒猫2匹をペットとして飼っています。もちろん猫ですから、おしゃべりはしますが、人間の言葉は話しません。でも、いろいろな感情的な繋がりを日々経験しています。この黒猫2匹は近所の保護センターに行ったときに、「黒猫はいますか」と尋ねたところ、センターの方が、「見てください。この小さな子猫たちは神社で保護されたのですが、このように2匹で楽しく遊んでいます」と説明されたのです。暗に2匹を離れ離れにさせるのはかわいそうだと言うのです。それで、2匹一緒に譲り受けることにしました。最初、娘はグレーの血統書付きの猫がいいと言っていました。私が「保護猫で黒猫なら飼う」と、その要求を退けました。今では、娘が一番かわいがっています。私がなぜ黒猫を飼うことにしたのかと申しますと、以前、20代後半に札幌に住んでいた時に黒猫をもらって育てたことがあったからです。当時、アパートに住んでいたのですが、もらったのは良かったのですが、当時はアルミの箱に砂を入れて用を足させるしかなくて、玄関においておくにしても、きつと匂いで大家さんに嫌がられると考えました。それで出した答えが、人間の和式トイレでその猫にうんちとおしっこをさせようというものでした。教え込むと、すぐにその黒猫は和式のトイレにお尻を突き出してトイレをするようになりました。私はいつもトイレのドアを開けておくようにして、自分が使用する時に一緒に流すだけで済んだのです。今でも、私の家族はこの話を信じてくれていませんが、思うに、その黒猫は自分が見ず知らずの私に突然もられて、今度こそは気に入られようと必死だったのではないかと思います。

現在私どもの家の黒猫のうち、オス猫は2階の猫部屋にいても、家族が夕食時に一階のリビングで話をしていると、必ず降りて来て自分の定位置の椅子に座ってテレビを見ますが、「僕も家族なんだから、一緒にいる！」と、その後ろ姿は主張しています。このオス猫はよく家の壁紙のクロスを爪でがりがりするので、僕が怒る人だと認識しているので、僕のことあまり好きではありません。家には爪とぎがいくつも置いてあるので、クロスで爪とぎをします。でも、家族は嫌われたくないので、誰も怒りません。それで、私だけが割を食っている

のですが、先日面白いことがありました。私が猫のトイレを掃除しているのをじっと、そのオス猫が見ていたのです。すると、そのあと、いつもは自分から私にすりすりしてくることに決してない、そのオス猫が何と、私にすりすりしに来たのです。自分のトイレをきれいに掃除してくれたことに対する感謝の気持ちを見わすために私にすりすりしてきたのです。一方、メス猫はたまに自宅に帰って来るお兄ちゃんが来ると嬉しいのですが、その嬉しさを私たち家族の前ではあまり表に出さないので、ずっと、2匹とも飼い始めてからお兄ちゃんの部屋で飼っていたので、私たち家族とは違って、お兄ちゃんのことを親だと思っっているのです。そんな息子が自立して家を出たので、たまに来ると、抱っこされてうれしいのです。が、それを私たち家族に見られると、メス猫は本当に申し訳ないような顔をしてくるのです。このように、猫でも犬に劣らず、いろいろな自分の感情を飼い主に伝えてくるのです。そうすると、飼い主の側も否応なくペットを愛着対象としてみるようになります。

さて、ペットロスは愛する人との死に分かれと同じく、愛着対象との死別です。愛着対象と死別すると落ち込むのは自然な感情の成り行きです。ここで、注意しておきたいことは、ペットである動物に対する人間の意識です。家族社会学の山田昌弘さんが「家族ペット」という本を出版したのが2007年です。副題が「ダンナよりもペットが大切!？」となっていて、ペットが家族の一員であるとの認識が日本で当然のことだと受けとめられている時代精神を反映したものでした。ペットが家族の一員になったことで、ペットの葬儀も人間と同じように行われるようになってきました。しかし一方で、ペットの葬儀が寺や教会で行われぬ状況も生まれました。おそらく、これは仏教の世界観が影響しているものと思われれます。仏教には「六道輪廻(ろくどうりんね)」という概念があつて、命ある者は6つの迷いの世界を流転し続けるという考えです。この6つの道というのは、天道、人間道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道で、それぞれが苦の世界であるというものです。動物は畜生道に生きる存在なので、人間が生きる人間道の世界とは根本的に異なる世界に生きている存在だという考えがあつて、そのために人間と同じような葬儀をすることがためらわれることがあると思われれます。

けれども、飼い主が愛着対象であるペットを亡くして悲嘆感情に襲われているとき、葬儀をすることは適切な行為です。そもそもキリスト教の葬儀は悲しむ者に寄り添い、その悲しみを神が慰めるお方であることを葬儀という礼拝を通して知らしめる行為です。主眼は、悲しんでいる人間を慰めることにあるのです。悲しんでいる人間に焦点を当てるならば、その死別によって生じた悲嘆感情や心身に生じた反応を癒すことが大切なのです。

ペットの死と向き合うことについて、いくつか本が出ていますが、それらの書籍を読んでみていつも思わされることは、人間のグリーフに対する理解ほとんどないことです。最近出版された「ペットロスいつか来るその日のために」(文春新書、伊藤秀倫著)もその一つで、ペットロスにならないために、新しいペットを飼うことも有効な手段だと説いています。確かに、新しいペットを迎えれると、そのお世話で忙しくなるので、悲しむ暇がなくなるというところはあるのですが、それは禁じ手だと思えます。

ペットと死別した時、その悲嘆感情にどのように自分自身が向き合うかがとても大切なことです。ペットと過ごした日々を顧みる時、その存在によって自分がいかに慰められたかを振り返るならば、ペットによって生きる力を与えられたことに感謝することができます。ペットと死別すると、落ち込むことは避けられません。しかし、愛着対象を喪うことは、それまでの自分のあたりまえの日常を喪うことでもあります。悲嘆感情によって落ち込む時間は、これまでの生活や人生を振り返り、今後の生き方を見つめ直す機会でもあるのです。ですから、大きな喪失体験は人生の岐路であり、そこから力強く歩み出していくためには、しばらく立ち止まることも必要なことかもしれません。この時、大切だと思われることは、ペットとの生活で自分にもたらされた恵みを数え上げることだと思えます。同じく、愛する者と死別した時も、その方との生活で自分にもたらされた恵みの数々を数え上げることだと思えます。そのような振り返りの時間を過ごすことが、今は亡き存在に対する敬愛の業になっていくのだと思えます。そして、その営みを通して私たちは、今はなくなってしまうペットという隣人に出会い続けていくのです。愛する存在との死別の経験が今後の自分の人生のありようを豊かに変えていくんだということが了解できるならば、亡くなってしまった愛する存在に対する敬愛を喪うことはないでしょうし、それは愛する存在をいつまでも、自分の生きる力の源泉にしていくことにもなるのです。そしてそれが愛する者に対する本当の追悼の業になっていくのだと思うのです。

ヨハネ福音書12章24節に「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」とあります。一粒の麦が地に落ちて死ぬことがあつて初めて、多くの実を結ぶことが始まるというのです。死ぬことは誰にとっても痛みをもたらしますが、その痛みが逆に生きる上で大きなエネルギーをもたらすことになるようにするのは、私たちが自分自身の悲嘆感情と向き合うことで生まれてくるものなのです。